

序にかえて

「食情報科学」についての今日的な課題

女子栄養大学教授 村 上 紀 子

◆文系の情報科学

文化栄養学科が創設されたときに本学に移り、研究室の名は「食情報科学」とした。これは造語。この名の学問体系があったわけではない。「情報科学」といえば、遺伝子情報などの生物学的な、あるいはコンピューターなどの情報工学的な、いわば理系の分野がイメージされる。当室の研究領域はいわば文系の、主として社会科学的な分野なので、ふつうなら「情報学」とするのだが、あえて情報科学にした。新学科が、文化と栄養という文と理の融合を目指すこと。また、今日の「食をめぐる情報」は、社会的な文脈で解こうとする際にも食の科学が密接にからむ場合が多いこと、などによる。

この食情報科学についての今日的な課題は何か。以下に、そのなかからいくつかを挙げる。

◆食情報のプロフェッショナルな発信者に

本学の学生は卒業後、専門性の濃さもあって、情報を発信する立場に立つことが従来から多い。さらにいまは、一般の人びとも情報の「受け手」一辺倒ではなくパソコンから自在に発信できる時代だけに、食情報の発信者としてのプロフェッショナル性をいかに高めるかが、今日的な課題の一つだ。

◇その一番の基礎は、文章表現。限られた字数で、伝えるべき情報を「過不足なく」書く訓練には、たとえば初心者向けに料理の作り方原稿を作成し、相手がその通りに作れたかどうかで伝達度を検証する、などがある。表現力の訓練には、たとえば「おいしい」「絶妙」といった言葉を一切使わずに「おいしさを伝える文章」を書くことで、ステレオタイプの見方ではなく自分の目で対象を観察し発見をする力をつける、などがある。

◇情報というものの性格や、マスメディアからインター

ネットまで各種メディアの媒体特性を、把握することも必要。しかし実はそれ以前に、「情報の著しい偏食」という実態がある。大半の学生は、新聞もテレビの報道番組も見していない。食の環境の全体像や刻々の変化を伝える情報に敏感でなければ、妥当な発信はむずかしい。

◆社会問題としての食、そして情報

「食と健康」に対する人びとの関心は非常に高い。時には大きな社会問題ともなり、そこでは決まって、情報やコミュニケーションが問われ、果たすべき役割が指摘される。現在とくに問題なのは、次の二つといえる。

◇まず、この食品には健康危害のリスクがあるという情報。BSEを契機に国が「リスク分析」の手法を導入したことは、食の安全性問題のパラダイムの切り替えともいえる。この手法には必須となる「リスク・コミュニケーション」を、いかに行うか。私が属している厚労省や都庁の食品安全情報の研究会でも、近くは「魚の水銀」問題などを事例研究して今後に備えようとするなど、行政は各方面で実践的な情報戦略を模索している。とすれば一方の消費者は、知る権利、意見を聞いてもらう権利を活かすためにどうすべきか。自立した「情報生活者」への道をどう模索するか。これも新たな課題である。

◇加えて、この食品は健康を維持増進する、と主張する情報。近年の健康食品とそれをめぐる情報の洪水は、輸入ダイエット食品のように時に死者さえ出す。これもまた社会問題といえよう。こうしたいわゆる健康情報にどう対応したらよいか。すでに20数年取り組んでいるのだが、実はかなりむずかしい課題である。それにしても一体なぜ、まともな食情報が本学からもたくさん発信されているのに、人びとは怪しげな健康情報に飛びついてしまうのか。その解明も、食情報科学についての、興味ある、というより切実な課題である。